

まほろん令和7年度

第1回



日本歴史の扉を開いた遺跡(1)

大阪府仁徳陵古墳・

奈良県箸墓古墳

— 古墳時代 —

まほろん館長 石川日出志

令和7年6月14日(土) まほろん講堂 13:30~15:00

13:00 受付開始・開場

まほろん館長講演 2025 年間計画

館長 石川日出志

■年間テーマ： 日本歴史の扉を開いた遺跡を語る（4回）

現在、私たちは日本歴史を、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代という時代の連なりで理解しています。これら各時代は、飛鳥・藤原・奈良時代といった文字史料を念頭に置いた時代区分とは異なり、考古資料に基づいて認識されたものです。各時代がどのように設定されたのかを紹介します。現在の考え方にも触れましょう。

□第1回（6月14日）： 古墳時代—大阪府仁徳陵古墳・奈良県箸墓古墳—

江戸時代に古代の天皇陵に関する関心が高まり、その探索が進みます。前方後円墳という名称も江戸時代に考案されました。歴史を解明するために古墳を発掘する取組みもありました。やがて明治年間になって歴史学・考古学が盛んになると「古墳時代」という時代も提唱されます。考古資料を用いて日本歴史のなかの一時代を認識する始まりです。しかし、時代の制約から本格的な議論は困難でした。戦後、そこから解放されます。

□第2回（8月23日）： 縄文時代—東京都大森貝塚—

日本における近代的考古学は1887（明治10）年に、E.S.Morseが大森貝塚を発掘し、2年後にその研究報告が出されたことに始まります。そこからやがて縄文時代という時代が認識されるようになっていきます。「古墳時代」という時代名称が提案される前のことですが、古墳をつくる人々とは異なるという意識があるので、古墳以後の歴史と対比してみていることになります。

□第3回（9月21日）： 弥生時代—東京都弥生町遺跡—

東京大学裏にある弥生町ケ岡貝塚から1884（明治17）年に1個の壺が見つかります。次いでそれが、通常貝塚から見つかる土器（現在の縄文土器）と異なる特徴があると判明して弥生式土器と命名され、やがて縄文時代と古墳時代の間をつなぐ独自の時代の指標とわかって弥生時代という時代名称が一般化します。

□第4回（12月7日）： 館長が半世紀前に憧れた卒業論文—丹羽茂氏をお迎えして—

1971年、丹羽茂氏の卒業論文が『福島大学考古学研究会研究紀要』第1冊として公にされ、翌年増刷されます。福大に考古学の専任教員がいなかったにもかかわらず、この卒論は当時の縄文時代研究の最先端を行くものでした。なぜこのようなことが実現したのでしょうか。当時の福島県内の考古学の様子を含めてお話を伺いたいと思います。

□第5回（2月21日）： 旧石器時代—群馬県岩宿遺跡—

戦前、日本歴史は縄文時代から始まると考えられていました。ところが1949年に岩宿遺跡が発掘されて、日本列島にも縄文時代以前の人類文化が実在することがわかりました。岩宿遺跡の調査成果がどのようなもので、その後どのような議論があったのかを紹介します。

第1回：古墳時代—大阪府仁徳陵古墳・奈良県箸墓古墳—

まほろん館長 石川 日出志

【導入】江戸時代に古代の天皇陵に関する関心が高まり、その探索が進む。前方後円墳という名称も江戸時代に考案された。歴史を解明するために古墳を発掘する取組みもあった。やがて明治年間になって歴史学・考古学が盛んになると「古墳時代」という時代も提唱される。考古資料を用いて日本歴史のなかの一時代を認識する始まりである。しかし、時代の制約から本格的な議論は困難だった。戦後、ようやく自由な議論ができるようになった。

* プリントは根拠資料を提示したので堅く感じるでしょうが、講演では優しく語ります。

1. 仁徳天皇陵古墳とは 【1～5】

(1) 所在地：大阪府堺市堺区大仙町に広がる百舌鳥古墳群のほぼ中央 【1】

(2) 日本最大の古墳＝世界最大の前方後円墳 【2・3】

・江戸時代に描かれた仁徳陵古墳 【3】

①. 前方後円墳：仁徳陵古墳の測量図を見てみよう 【2】

・地震による墳丘の崩落で墳形の判読が難しくなっている → 判読の方法 【6】

②. 前方後円墳の大きさを知る難しさ：従来と現在認識される規模の違い

・周濠水位をどう考えるか？ 近世に溜池機能を高めた、

・従来—現在比較：墳丘全長 478m—512m、後円部径 245m—284m、前方部幅 300m—352m、墳丘体積 1,405,866 m³—2191

③. この古墳をどう呼ぶのか？

・百舌鳥耳原中陵（もずみみはらのなかのみさきぎ）＝宮内庁陵墓名称

・仁徳天皇陵

・伝仁徳陵古墳

・大仙（山：だいせん）古墳：地名（字名）＝考古学的名称

→ 天皇（大王）比定が妥当なのはごく一部にすぎないことに注意、

④. 現在は陵墓として宮内庁管理（江戸時代から次第に制限）、

・ただし、陵墓の保全・補修に際して考古学的な措置をとる、

・17学協会代表者にのみ、主に修繕時に立ち入り観察を認める、

(3) 過去に埋葬施設・遺物が発見された！

①. 1872年（明治5）、前方部斜面で（長持形）石棺（長さ2.7m、幅1.45m）、甲冑が出土
【3下左・4】

②. 1698年（貞享2）後円部盗掘坑を埋め戻し、1698年（元禄十一）・1722年（享保七）に修陵、1755年（宝暦七）『全堺詳志』に「御廟は北にあり、石の唐櫃あり」＝長さ3.18m・幅1.65m、【3下右：推定復元】

③. アメリカ・ボストン美術館に「伝仁徳陵古墳・百舌鳥古墳群」出土遺物 【5】

(4) 現在の位置づけ 【7】

- ・須恵器大甕や埴輪から古墳時代中期：5世紀中ごろ
- ・南朝宋に遣使した「倭の五王」(讃：421年，珍：438年，済：443年，興462年，武：477年)の時代

2. 「古墳時代」という用語の始まり：

- ・八木槌三郎 1896 (明治 29) 「日本の古墳時代」『史学雑誌』第7巻第11号 【8下右】
…「吾邦上古の時代に当たりて人々広大なる墳墓を築造し、以て死者の靈魂を慰せしことあり、予は便宜上當時を目して日本の古墳時代と謂ふ。」
→ 天皇陵が多いがそうでない墳墓もある、それが特徴的な時代を「古墳時代」と命名。
→ 考古資料により歴史上の一時代を命名する始まり、(八木はのち「高塚時代」を使用。)
* 大森貝塚の調査・報告など 1870 年代にはすでに石器時代という認識はあったが、それも天皇陵などの古墳が視野にあってのこと、では、天皇陵・古墳はどう認識されてきたか？

3. 天皇陵・古墳への関心・探求の歩み

(1) 古代の天皇陵への関心・記事：仁徳陵を例に

- ・『古事記』：大雀命(おおささぎのみこと/仁徳天皇)の御陵は毛受之耳原(もずのみみはら)に。
- ・『日本書紀』：仁徳八七年(399)、百舌鳥野陵(もずのみささぎ)に葬る。
- ・『延喜式』(巻21 諸陵式)：仁徳・履中・反正三陵が百舌鳥耳原中陵・南陵・北陵。【1】
→ 現在の宮内庁はこれに基づいて三陵を比定。しかし、平安時代の認識なので史料批判が必要＝事実と確定することはできない。

(2) 「古墳」に関する江戸時代の関心 【9】

- ・徳川光圀：延宝四年(1676)に発見された那須国造碑に見える「那須国造直章提(いで)」の墓を知るために、元禄五年(1692)に大田原市湯津上：上侍塚・下侍塚古墳を発掘。
- ・松平定信(白河藩第3代藩主)：寛政十二年(1800)頃『集古十種』編む、弥生時代～古代の各種資料を集成図示、各地の古墳出土の武器・馬具・銅鏡など。
- ・蒲生君平：文化五年(1808)『山陵志』、「前方後円墳」の名称。
- ・文久の修陵：文久二年(1862)～で「神武天皇」陵造営

(3) 明治期の国家政策：王政復古、古代文化と西欧国家制度に照らした近代天皇制国家建設

- ・久米邦武(筆禍)事件：1892年「神道は祭天の古俗」『史海』8 【8上】
西欧流の文明史観派のひとり、久米の論文を、天皇制批判とみなして国史史観派が糾弾して、東大を追放。 → やがて戦前の皇国史観絶対視を生むことに。

(4) 「古墳時代」探求が大きく制約される

- ・偶然工事中に発見された古墳出土品により、各種遺物研究は進展。
- ・一方、古墳がつくられた時代は「大和朝廷」の時代＝記紀(古事記・日本書紀)の記述と抵触するために、時代・社会・歴史の議論は封印される。
- ・時代名称：後藤守一 1927『日本考古学』＝「先史時代」～「原史時代」～「歴史時代」
後藤 1938「古墳文化」『日本文化史大系』1＝「古墳時代」！ 【8下】

4. 戦後、古墳時代研究が皇国史観の呪縛から解かれる 【10】

(1) 小林行雄による古墳時代理解の基本：1951『日本考古学概説』創元社

- ・「貴族の墳墓が顕著なる存在となった古墳時代」,「その私有せる財富と政治的権力とを以て、一般地方民衆の上に君臨するとともに、畿内を中心とし、そこに最高峰を有する共通の文化を保持した」といった「畿内の優越性」・「大和に占拠する権力者の政治的優越性を意味し、天皇制国家の成立を立証するか否か、これまた軽々しく断じえない大きな疑問である」(p.12).

⇒ 戦前の「大和朝廷」のイメージを払拭する試みだが、研究の枠組みを小林が長く堅持、

(2) 1989年小林行雄死去ののち、古墳時代、とくに古墳研究の見直しが大きく進む。

(例) 都出比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」『日本史研究』

347 (都出 2005『前方後円墳と社会』塙書房、所収)

北條芳隆・溝口孝司・村上恭通 2000『古墳時代像を見なおす』青木書店

(3) 現在、古墳(前方後円墳)の出現はどのように考えられているのか？

①. 「定型的な前方後円墳」の出現 【11】

- ・定形的な前方後円形の墳丘(葺石)
- ・後円部に竪穴式石室
- ・中国(後漢・魏)鏡の多数副葬

②. 畿内を中心とする地域最有力首長どうしの連携関係 【12】

- ・「同範」三角縁神獣鏡の分有関係
- ・定形的な前方後円墳規格の共有、箸墓古墳を頂点とする格差序列

③. その中心はオオヤマト古墳群であり、起点は纏向遺跡の形成 【13】

* 邪馬台国所在地論争とは別に、古墳時代社会の形成はここに始まる

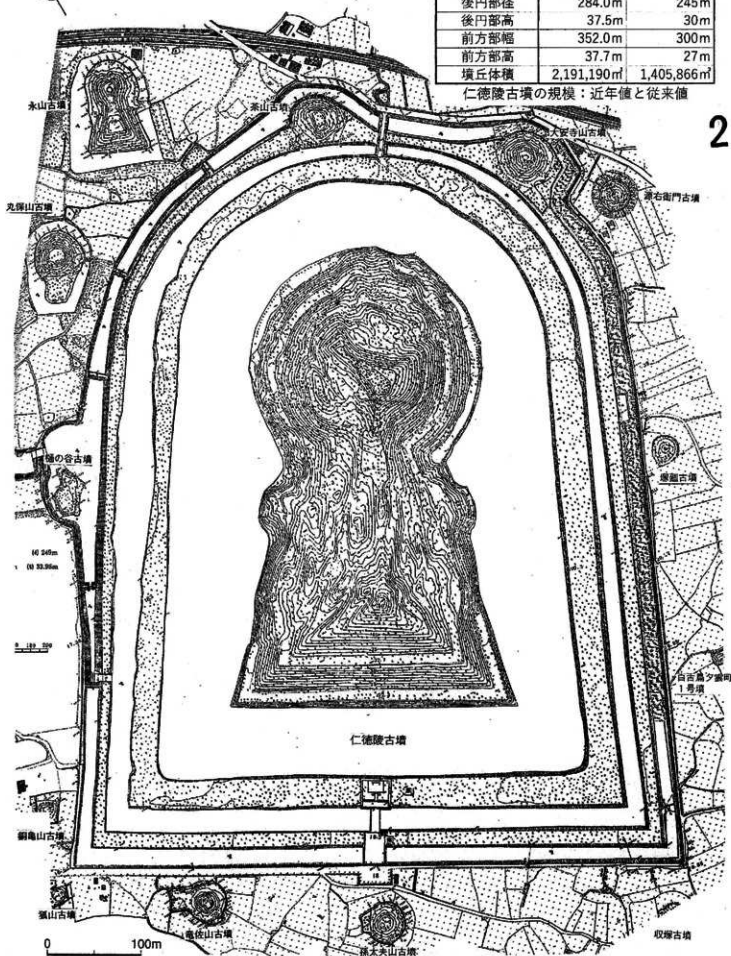
【参考文献・図引用文献】(上掲のもの以外)

- ・石川日出志 2016『農耕社会の成立』岩波新書(10刷版)
- ・石野博信 2008『邪馬台国の候補地 纏向遺跡』シリーズ遺跡を学ぶ 051, 新泉社
- ・一瀬和夫 2009『古墳時代のシンボル 仁徳陵古墳』シリーズ遺跡を学ぶ 055, 新泉社
- ・大阪府史編纂専門委員会 1978『大阪府史』第1巻, 大阪府
- ・橿原考古学研究所 1997『大和の前期古墳Ⅱ 下池山国府・中山大塚古墳調査概報 付、箸墓古墳調査概報』学生社
- ・橿原考古学研究所 2001『大和の前期古墳Ⅳ ホケノ山古墳調査概報』学生社
- ・京都大学文学部考古学研究室 1989『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』京都大学文学部
- ・末永雅雄(編) 1961『日本の古墳』朝日新聞社
- ・新納 泉 1992『V古墳時代 1時代概説』『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会
- ・斎藤 忠 1979『日本考古学史料集成 1 江戸時代』斎藤考古学研究所
- ・白石太一郎 1989『古代を考える 古墳』吉川弘文館
- ・白石太一郎・春成秀爾ほか 1984『箸墓古墳の再検討』『国立歴史民俗博物館研究報告』3
- ・田中 彰・宮地正人 1991『歴史認識』日本近代思想大系 13, 岩波書店
- ・山中一郎・狩野 久 1992『新版古代の日本 5 近畿 1』角川書店

	一瀬2009	従来
全長(含周濠)	840.0m	
墳丘長	512.0m	478m
後円部径	284.0m	245m
後円部高	37.5m	30m
前方部幅	352.0m	300m
前方部高	37.7m	27m
墳丘体積	2,191,190m ³	1,405,866m ³

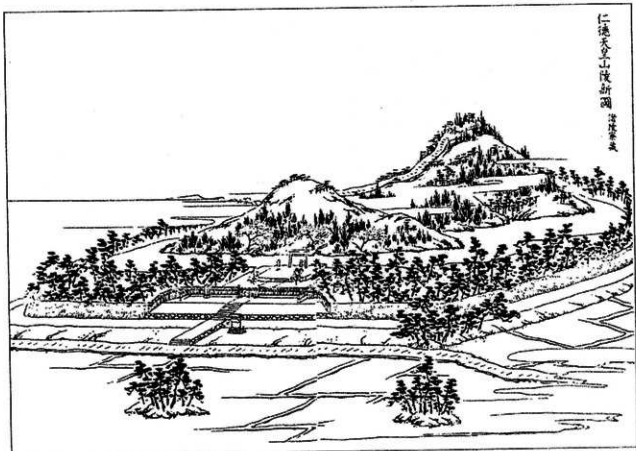
仁徳陵古墳の規模：近年値と従来値

2



大阪府堺市大山（伝仁徳天皇陵）古墳（2）：地震で墳丘の崩落が激しい（末永1961）

仁徳天皇山陵新図
 澤庵宗義



幕末に描かれた仁徳天皇陵古墳（「仁徳天皇山陵新図」『古事類苑』）

江戸時代の後円部発見石棺の復元（一瀬 2009）

明治 5 年発見の前方部石棺（一瀬 2009）

大阪府堺市大山（伝仁徳天皇陵）古墳（3）

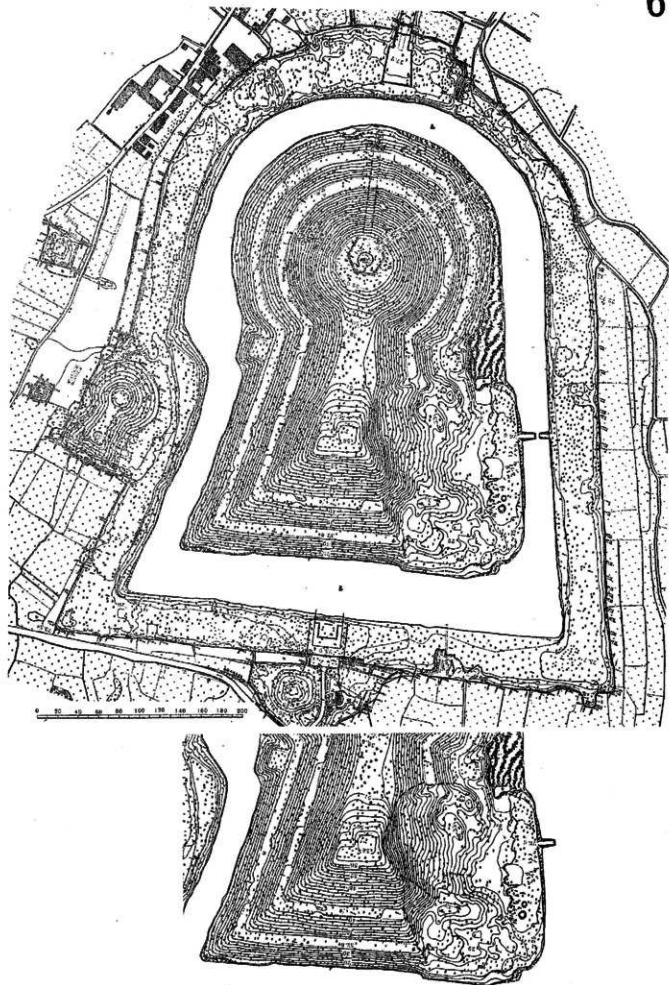
細線式獸帯鏡（踏返し鏡）：径 23.5 cm

単龍環頭大刀：現存長 23.0 cm

三環鈴：左右 13 cm

鳥鐸：右高さ 18.7 cm

大阪府堺市大山（伝仁徳天皇陵）古墳（5）：
ボストン美術館の伝仁徳陵古墳出土品（一瀬 2009）

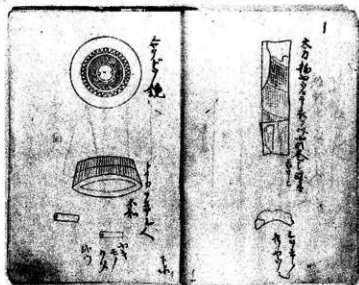
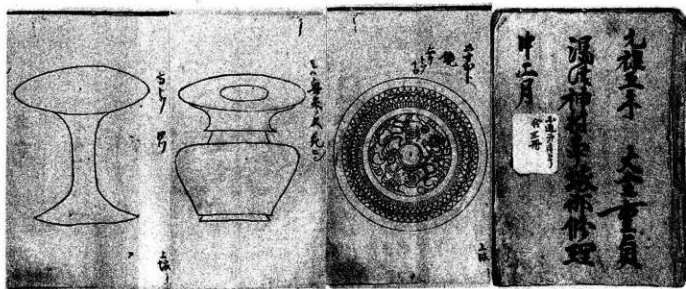


参考：大阪府営田御廟山（伝応神陵）古墳（末永 1961）

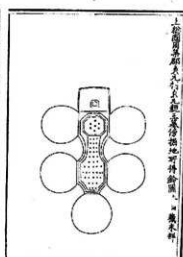
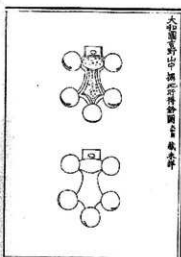
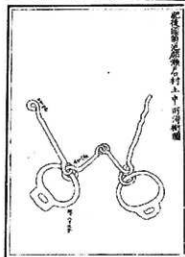
時期	墳 丘	埋葬施設	埴 輪	鏡	石製品	農工具	武器・武具	代表的古墳
1			円筒埴輪	三角縁神鏡		直刀	笠形板蓋銅甲	奈良・箸墓 京都・藤井大塚山 岡山・飯月坂1号
2				三角縁神鏡 (仿製)	鏡形石製品		方形板蓋銅甲	奈良・外山赤石山 大阪・黄金山 滋賀・雲雀山
3				三角縁神鏡 (小器化)				奈良・メスリ山 大阪・芥天山1号 福岡・橘子塚
4					滑石製鏡製品		長方形・三角板蓋銅甲	奈良・松尾田宝塚 大阪・黄金塚 岐阜・御門寺
5							雷	奈良・風山 大阪・津雲城山 岡山・月の輪
6							雷	大阪・伝説中陵 奈良・笠山 大阪・豊中大塚
7						曲刀	三角縁・板蓋銅甲 新製銅甲	大阪・伝説中陵 大阪・アリ山 滋賀・新開
8						U字形鍔光		大阪・黒庭山 大阪・野中 福岡・月の間
9								和歌山・大谷 熊本・江田船山 埼玉・稲荷山
10								大阪・今城塚 奈良・市尾墓山 福岡・赤倉王塚
11								奈良・見取丸山 奈良・二塚 岡山・こうもり塚
12				海部夷神鏡				奈良・石神台 奈良・新屋山 千葉・若葉

③ 古墳と副葬品の変遷 和田晴吉による隔年案を参考に、時期による変化のはっきりした要素を選んで、その消長を図示した。階層による格差が大きい墳丘や埋葬施設については、おもに大王墓級の古墳における変遷を表した。

古墳時代：古墳と副葬品の変遷（新納 1992）



光圀による上・下車塚古墳調査の記録『湯津上村車塚御修理』
(斎藤忠 1979)



松平定信『集古十種』に見える全国の古墳発見遺物 (斎藤忠 1979)

小林 行雄

日本考古学概説

創元社

昭和二十六年十二月二十日 初版印刷
昭和二十六年十二月三十日 初版発行

創元社

小林行雄の名著 1951

わが国の古代における階級・身分の発生が、はたして豊穡社会としての誕生期時代のうちにその萌芽を認めうるか、はたまた貴族の墳墓が顯著なる存在を示すようになったか、古墳時代の開始をもつて劃期されるかという問題は、現時の学界における重要な関心のなつてゐる。さういふ、これらの古墳時代の発生たるは、その私権を有する財富と政治的権力とを以て、一般地方民衆の上に君臨するとともに、畿内を中心とし、そこに支配権を有する共同の文化を保持したのであるが、このような古墳時代文化における畿内の優位性の存在が、ただちに大和に占據する権力者の政治的優越性を意味し、天皇制國家の成立を立證するに否か、これまた疑義なく断じえない大きな問題である。

これらの問題を論ずるためには、當時から取り傳へられていた神話傳說を、後代に記録し・編輯したと考へられる「古事記」「日本書紀」などの、史書の内容をも検討し、考古学と歴史学との、二つの面からの考察が必要である。かくの如く、古墳時代は不完全ではあるが一應整へた歴史のある時代と考へられるので、事實上即ち歴史記述を有する後の歴史時代と區別して、これを歴史時代と呼び、またそれ以前の縄文時代及び彌生時代を先史時代と稱することゝ一般に行われている。これらの三つの時代の考古学的研究が、それぞれ文獻を利用しうる程度に際して、爲つた歴史・方法を必要とすることは、いふまでもないことである。

戦後進んだ古墳時代の見なおし

日本史研究会編集

日本史研究 343

1991.3

1990年度 日本史研究会大会特集号

大会統一テーマ 社会構造の変容と国家

全体会シンポジウム

テーマ 前近代國家論の再生のために

日本古代の國家形成論序説

——前方後円墳体制の提唱——

コメント

都 出 比呂志

熊 野 聡

石 上 英 一



『古代史発展』6, 1989)

見なす

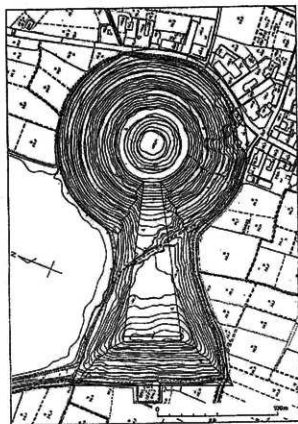
北條芳隆
溝口孝司
村上恭通成立過程と
社会変革

古墳時代像を

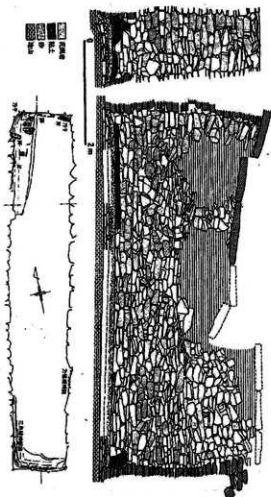
従来の諸理論・方法を
根底的に問う最新の発掘成果と理論の統合により、
古墳時代移行期の実像に迫る。吉本書店
定価・本体3,800円

北條・溝口・村上 2000

都出比呂志 1991 論文と 1989 図式



定形的な前方後円形の墳丘
(奈良県箸墓古墳：白石ほか 1984)



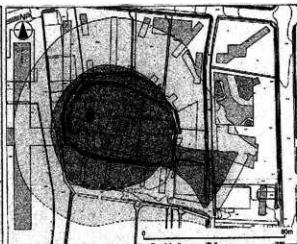
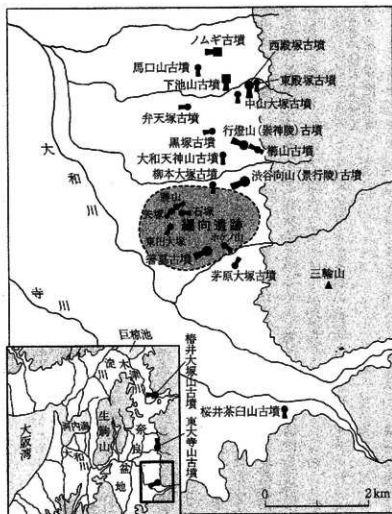
長大な竪穴式石室（京都府椿井大塚山古墳：京大 1989）



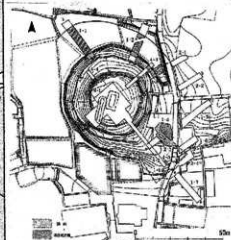
中国（後漢・魏）鏡の多数副葬
(奈良県黒塚古墳：樫考研 1999)



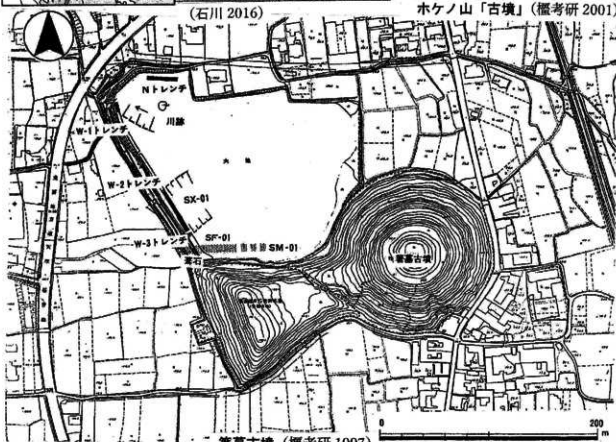
「定形的な前方後円墳」をもって「古墳」の始まりとみる



纏向石塚「古墳」(石野 2008)



水ヶノ山「古墳」(樫考研 2001)



箸墓古墳 (樫考研 1997)

纏向遺跡とオオヤマト古墳群